● 論　文 ●

ノルベルト・エリアス―『文明化の過程』について

大　平　　章

Norbert Elias – On *The Civilizing Process*

Akira OHIRA

Abstract

Just 70 years have passed since Norbert Elias's great book, *Über den Prozeß der Zivilisation* (*The Civilizing Process*), was published in Switzerland. It is a unique book tracing the process through which civilized manners and etiquette and modes of conduct in Western society have taken shape since the Middle Ages in association with state formation. It is also an unprecedentedly daring attempt to organically connect the sociogenesis and psychogenesis of individual human integration as national or ethnic communities from a long-term perspective on the basis of sociological and historical knowledge.

The purpose of this essay is to demonstrate how successful Elias is in connecting the changing aspects of everyday life in human society with its dynamic transformation over time as part of his methodology called *figurational* sociology. Another purpose is to suggest that his important sociological concepts of human interdependencies and their ever-widening networks are far more effective means of studying both Western and Asian societies under globalizing processes in terms of political, economic and cultural relationships. In that sense the paper puts more emphasis on the fact that Elias himself, especially in his later life, applied his theory of the civilizing process to new areas such as the changing relationships between parents and children in modern society and the influence of modern technology on human life as a whole.

（1）『文明化の過程』の出版の背景とその意味

ノルベルト・エリアス（1897 – 1990）の大著『文明化の過程』（*Über den Prozeß der Zivilisation*）はちょうど第２次世界大戦が勃発した 1939

年に主として亡命者の著書を受け入れていたドイツの出版社からスイスで出版されたが，当時，ドイツはもちろんオーストリアやチェコスロバキアなど他のドイツ語圏も第3帝国に支配されていたこともあり，ユダヤ人の著書が市場で注目を浴びることはありえなかった。[1] フランスを経てイギリスに亡命し，1954年に57歳でようやくレスター大学の専任教員として教えることになったとはいえ，エリアスはまだ有力な社会学者として認知されていたわけではなかった。1965年にはJ・L・スコットソンとの共著『定着者と部外者』（*The Established and the Outsiders*）が，さらに1969年には『文明化の過程』の第2版が新たな序論付きで出版されたことで彼の存在は少しずつ意識されるようになった。それでもその英訳（*The Civilizing Process*）が出版されたのが1978年（第1巻）と1980年（第2巻）であったことを考えると，英語圏の読者にエリアスのこの大作が読まれるようになった時期は決して早くはなかった。[2]

『文明化の過程』が第2次世界大戦の開始時に出版されたということは，ある意味では皮肉である。なぜなら，当時世界は本書のタイトルが示す「文明化」とは正反対の方向，つまり未曾有の文明破壊の方向に向いつつあったからである。したがって，本書が悲劇的な戦争への批判的態度を示さず，西洋の文明化を絶対視しているという皮相な見方をされてもある意味では仕方がないことであった。文明化の背後には暴力と破壊の衝動が潜み，文明社会に住む人間は常にその恐怖に脅かされるが，そうした危機に直面しながらも，人類には紆余曲折を経て何とか明るい未来を切り開くことができるといったいくぶん警告的で反省的な，もしくは建設的な著者の態度を理解するのはむつかしい。最初の見方は，『文明化の過程』に見え隠れする西洋中心主義的な発想と色合いを常に著者の基本的態度と見なし，2番目は，文明化の過程で生じる創造と破壊の表裏一体性に社会変動のメカニズムを見ることで，本書の潜在的意義を，また同時に，複雑に変化する現代の人間社会を読み解く鍵を見出そうとする。

エリアスの発展社会学もしくは過程社会学の方法からすれば，社会ダーウィニズムに裏打ちされた西洋中心主義はむしろ克服されるべき概念なのである。彼が多くの著書で指摘しているように，高度に産業化された社会に住む現代人（特に西洋の人々）は初めから文明化されていたわけでなく，原始状態もしくは野蛮な状態から徐々に，また段階的に文明化されたにもかかわらず，これまでの過程をすっかり忘れ，まるで生まれたときから自分たちは文明化されているかのごとく思っているところに問題が生じるの

である。したがって，文明化されたはずの社会でホロコーストやテロリズムなどの残虐な暴力行為が起こったとき，文明社会では起こるはずもない事件がなぜ，どのようにして起こったのかという素朴な疑問を発し，逆にその答えに窮することになるのである。その場合，われわれの多くはたいてい事件の張本人を「悪人」もしくは「敵」として，自分たちを「善人」もしくは「味方」として固定的，対極的に捉えがちである。

エリアスは『文明化の過程』を通じて，そのような問に答え，問題の根本原因を究明し，最終的な解決策を提示してくれるわけではないが，少なくともそれがどのような過程を経て起こりうるのかを分析し，説明してくれるのである。そういう意味では，エリアスが「この研究はそれゆえ非常に広い範囲の問題を指摘し，発展させるが，あえてそれを解決しようとするものではない」[3]，と言うとき，われわれは彼にそれ以上の要求することはできない。それを実践するのは別の種類の社会科学の役目であり，その代わりに，彼が目指す長期的な視野による社会研究は，経験的な作業に依拠した理論統合を通じて，われわれが人間社会の理解を深めるためのより「現実適合的な」知識を開拓することに資するのである。

ともかくエリアスが文明化の問題を到達点ではなく「過程」として捉えようとしたことは，少なくとも彼が西洋中心主義的，現代中心主義的な思考や発想から離れ，人間の行動様式の歴史的変化に対する失われた意識を回復するための作業を，中世から近世という限定された空間とはいえ，巨視的な認識を通じて，優先させたことを意味する。そのため彼が多様な学問領域（社会学・歴史学・心理学・民族学・言語学・人類学など）の成果を利用しようとしたのは，学際的な研究を誇示するためではなく，そうした手順を最も効果的に進めるためであった。こうした研究の意味と目的は，『文明化の過程』の序文で次のように簡潔に語られている。

> …しかし，この研究においてわたしは，われわれの文明化された行動様式がすべての人間の可能な行動様式のうちで最も進歩したものであるという観念や，「文明化」が最悪の生の形態であり，かつ運命づけられたものであるといった見解に導かれてきたわけではない。今日，理解されているのはただ，文明化が徐々に進むにつれて，数々の，明らかに文明に関連する困難が発生するということなのである。かといって，実際われわれが苦しんでいる理由を，われわれはこうした形ですでに理解しているなどとは言えない。自分たちは，文明化によっ

て，あまり文明化されていない人々には分からないようないくつかの面倒な事態に陥ってしまった，とわれわれは感じている。しかし，これらのあまり文明化されていない人々が彼らの側では，自分たちがもはや，あるいは少なくとも同じ程度には苦しむことのない困難や恐怖にしばしば悩まされていることをわれわれはまた知るのである。おそらくこのことすべてが，もしそのような文明化の過程が実際どのように起こるのかを理解できれば，いくぶんもっと明らかに見えるようになるのであろう。ともかくそうした願望の１つを心に抱いてわたしはこの本に取り組むことになったのである。おそらく，より明瞭な理解によってわれわれはいつの日か，今日われわれの内部でまたその周辺で，自然現象とは非常に違った形で起こるこれらの過程を，さらに中世の人々が自然の力に対峙したようにわれわれが向かい合っているこれらの過程を，より意識的な統御に近づけることに成功するのかもしれない。[4]

人間の変化する行動様式と社会構造の関係を長期的な視野で捉えようとするこうした発想には明らかに西洋中心主義を超えようとする意図が窺われる。そこにはある時代の人間社会が別の時代の人間社会よりも質的に優れているとか，階級的矛盾をはらんだ社会は階級のない平等な社会によって乗り越えられるべきであるという評価的判断はない。かといってエリアスは歴史的相対主義や静態主義に賛同しながら永久に不変で，構造的に同質な人間社会を理想化しているわけでもない。彼がたびたび指摘しているように，むしろ構造機能主義的なモデルの有効性を疑問視することで，長い時を経てダイナミックに変容する人格構造と社会構造の相互依存的発展モデルが得られるのである。次の引用に使われている「法則」とか「秩序」などの言葉は，構造主義的な色合いがなくもないが，そこで示唆されている方法論は，実質的には，従来の構造主義とは違うエリアス独自の社会学の方法論であり，その意図を理解することが同時に『文明化の過程』の実りのある解釈につながる。

われわれをしてこの「静態主義」という難関（それはすべての歴史的運動を動かない何か，進化しない何かとして表現しがちである）と「歴史的相対主義」（それは，この変化の根底を支える秩序や歴史的構造の形成を支配する法則に深く入り込むこともなく，歴史の中に恒常

的変容しか見ない）という難関の間をうまく通り抜ける知的な方法や手段を探求させてくれるのは，理論的偏見ではなく，経験そのものである。それがここで企図されていることなのである。社会発生と心理発生の研究が，歴史的変化，その力学，その具体的な機構を支えている秩序を明らかにしようとしている。そして，このような形で，今日，複雑であり，あるいは理解しがたいとさえ感じられる数々の疑問に，かなり単純で正確な答えが与えられるように思われる。[5]

もちろんここで使われている「法則」や「秩序」などの言葉は普遍的に妥当する形而上学的真理や，哲学的あるいは神学的概念を意味しているのではない。それらはある時代から別の時代へと長期的な尺度で変化する人間の行動様式や社会構造の変化を生み出す力学のことであり，エリアスの言葉を使えば，「相互依存の連鎖」，「編み合わせ関係」であり，「形態」（figuration）でもある。エリアスがここで批判の対象にした「静態主義」や「歴史的相対主義」とは社会学ではタルコット・パーソンズの機能的構造主義であり[6]，また哲学ではデカルト，カント，ライプニッツなどによって提示された西洋の伝統的な自我中心の思考方法である。エリアスはこうした近代的自我の観念から抜け出せない哲学者のイメージを「閉ざされた人間」（*homo clausus*）と命名した。それは，世界を「主観」と「客観」，「精神」と「物質」，「秩序」と「無秩序」の二項対立的な概念で捉えようとする認識論につながる。さらにそれに対するエリアスの批判は，還元主義的な古典物理学の手順や，原子論的解釈を社会科学に用いることへの疑問視でもある。

このような議論は『文明化の過程』の解釈とは一見無縁のようであるが，実際そうではない。たとえば，われわれは哲学的な概念や政治上のイデオロギーを余暇やスポーツや食事などから切り離し，非日常性と日常性の間に壁を作りがちである。その際たいてい前者を研究に値する対象，後者をその逆と見なす。ところが，今日のグローバル化され，国際的な規模で展開されるスポーツ大会およびそれに付随する薬物使用のような問題を国際的な政治組織と分離することは不可能である。それは本来的には予測されない無計画の発展として理解される。エリアスが『文明化の過程』の上巻で扱った「ヨーロッパにおける行儀作法の変化の歴史」と下巻のテーマである「国家形成と文明化」についても同じことが言える。二分法的な思考に慣れている人にはマナーの変化と国家の発展の相互依存関係を理解することはむつかしい。この２つのテーマを切り離さないで同レベルで解釈す

ることが本書におけるエリアスの目的であり，読者もそうして初めてエリアスの社会学の本質に接近することができる。S・メネルが指摘しているように，そういう意味では『文明化の過程』は決してやさしい本ではない。なぜなら，本書におけるエリアスの理論はまるで螺旋のように展開され，大小の波が岸辺に打ち寄せるように波状的に語られるからである。[7] 換言すれば，いずれのテーマにもマクロな視点とミクロな視点が微妙に交じり合い，個別の問題は大きな理論と表裏一体である。一見すると，エリアスは自分の方法論を単に繰り返しているようであるが，そうではなく，研究対象の発展的性格を捉えるために多様な視野を導入し，同時に経験的な見地から引き出される豊富な諸例によって段階的に自らの社会学的方法論の妥当性を立証しようとしているのである。こうした過程分析は，「閉ざされた人間」に固有の二分法的思考には欠落しがちである。

こうした思考や価値判断が現在でも根強く残っている例として，たとえば，イスラム原理主義者によるテロリズムが挙げられよう。多くの場合，テロリズムとそれを容認する集団は，世界で最も自由で民主主義的な国家の代表とされるアメリカの存在意義を否定する「文明の敵」として位置づけられ，「悪魔化」される。これに反して，アメリカの覇権主義を批判する人々は，その傲慢な対外政策こそ国際的な政治対立を助長する原因であり，テロ支援国家を空爆することで罪のない一般市民を殺しているのはむしろアメリカの国防総省であると主張する。[8] ここでは「善人」と「悪人」が峻別され，少なくとも「善」が「悪」に変り，「悪」から「善」が生じるという過程的視点が失われ，結果として世界は「文明の衝突」という忌まわしい表現で価値判断されがちである。

エリアスの『文明化の過程』はまずこうした二分法的な認識から離れることをわれわれに要求する。現代人は文明化され，古代人あるいは中世の人々は文明化されていないとか，また逆に現代の産業社会に暮らす人々は疎外され，農耕狩猟社会に住む人々は開放的であるという固定観念を捨てなければならない。行儀作法の変化にともなう国家の形成は長期的な歴史過程の中で，相互に依存し，ある時は遠心的な力学で分解し，またある時は求心的な力学で統合するという認識が求められるのである。

(2)「文明化」と「文化」の定義

『文明化の過程』におけるエリアスの方法論上の特筆すべき点は彼独自

の文明化についての緻密な議論に見られる。彼は，それが最終的にはどのようにして政治・経済・科学技術・文学・芸術・生活様式全般における近代西洋の優越意識に結びついたか，あるいはその過程で，未開社会や同時代の非西洋社会を「文明化されていない」と見なす西洋中心主義的，植民地主義的イデオロギーがどのようにして固定化されていくかを分析する。

エリアスによると，文明化にはその出発点とも言うべき「零度」は存在しない。文明化の概念は，中世からルネッサンス時代を経て近代にいたるまでの長い過程を通じて発展したものであり，それは特別な才能に恵まれた個人によって突然創造されたものではなく，諸集団の相互依存関係，編み合わせ関係の拡大による無計画の所産なのである。その基本的な原動力は，食事・服装・生理的行為・話し方などにおける西洋人の行儀作法や行動基準の変化，およびそれと並行する社会構造の変化（国家構造の変化と発展）である。両者は不可分であり，どちらが原因でも結果でもない。したがって，西洋人の文明化された行動や態度はヘーゲルの「精神」に一元化されるものでもなく，近代的な経済組織を備えた国家の発展はマルクスの「物質」に還元されるものでもない。行動基準の上昇や自己規制の増大，すなわち合理性の前進や長期的予測能力の拡大は，分業と協業が著しく進んだ産業社会を生み出し，また逆に経済組織の機能的分化はさらにきめ細かい感情規制を人間に要求するという形で，両者は相乗効果を発揮する。しかし，エリアスによると，文明化が人間に絶対的な満足感や幸福感をもたらすかどうかは分からないが，それはやがて宗主国から植民地へと移り，そこの上流層にも影響力を持つ。つまり，エリアスの言う「文明化」とは止ることのない，永遠に続く人格構造と社会構造の変化のベクトルである。

エリアスはこの問題に関連して，『文明化の過程』の第１部でドイツにおける「文明化」（*Zivilisation*）と「文化」（*Kultur*）の概念の対立，さらにはフランスにおける「文明化」（*civilisation*）の概念の社会発生についてきわめて興味深い議論を展開している。「文明化」の概念は，19 世紀から 20 世紀初期にかけて，その比類のない経済力，軍事力，科学技術能力を背景に西洋中心主義的イデオロギーとして固定化されていくが，それ以前には，ドイツ，フランス，イギリスなどにおいて微妙な違いがあり，そのことがこれらの国々の国家形成や人格構造・国民気質に大きな影響を与えたことをエリアスは文学作品や思想家の発言を例に挙げて証明しようとする。

ドイツにおける「文明化」と「文化」の概念の対立関係は，エリアスの解釈に従うと，ドイツの長い歴史的過程を通じて生まれたものであり，そ

れはまずフランスやイギリスに比べて国家的統一が遅れたドイツ独自の事情を反映している。そして，これはドイツの国家像やドイツ国民の一体感の形成において重大な意味を持つ。ドイツでは「文明化」はドイツの中産階級市民とはあまり接触する機会のない貴族階級の生活意識や価値観の象徴であり，これに対して，「文明化」を上流階級の虚栄や虚飾と見なす中産階級は「文化」を自らの知的拠り所とする。貴族は政治的実権を握り，官僚機構でも要職を占めるが，そこに参加できない中産階級のインテリ層は大学を中心として読書文化に集団的一体感を見出すようになる。こうした両階級の価値観の対立をエリアスはゲーテの『若きウェルテルの悩み』や『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』などの小説や戯曲にもたどる。あるいはまた同様の問題は，フランスで教育を受け，フランス語を得意とし，フランス古典劇を愛するプロシアのフリードリヒ大王と，シェイクスピアの演劇を熱烈に支持するドイツ市民との芸術規範をめぐる対立の中にも暗示される。

やがてドイツのインテリ層は知的上昇志向を募らせる反面，対外的には国家の統一の遅れ，第１次世界大戦の敗北によってプライドを傷つけられる。こうした両面価値的態度がワイマール共和国の混乱期からナチズムの台頭する時期にかけてさらに増大し，彼らはついにそうした不満を一挙に解消してくれる偉大なリーダーや英雄，つまりカリスマの出現を夢想するようになる。一方，ドイツの貴族も 30 年戦争以降の経済的，文化的荒廃によってフランス的な宮廷文化を育むことができず，行政官や職業軍人を理想とする官僚化の文化へと傾斜する。

このようにドイツの「文明化」と「文化」の概念の対立は，複雑に交差し，さまざまな変種や異形を生み出しながら，やがて第２次世界大戦以前にはドイツ人固有の国民的気質として定着するが，それは文明化の過程と表裏一体の関係にある「非文明化の過程」を考える上で重要である。「非文明化の過程」とは，端的に言えば，長い経済不況や政治的不安定，革命がもたらす混乱，政府の威信の失墜などによって，短期間のうちに起こる現象であり，個々人が計画したり，意図したりするものではない。[9] こうした独特の人格構造を生み出すドイツ的状況を先取りするかのように，『文明化の過程』の第１章でエリアスはその状況を下の引用のように説明している。それは，テオドール・フォンターネの「ドイツ人は，生きるために生き，イギリス人は代表するために生きる。ドイツ人は自分のために生き，イギリス人は他者のために生きる」[10] という言葉に関連しているものであ

り，同時に，貴族の外面的な礼儀正しさに反対するエッカーマンがゲーテに向って「わたしはたいてい自分の個人的な好き嫌い，人を愛し，人から愛されるある程度の必要性を社会に持ち込みます。自分の気質に合う個性をわたしは求めます」[11] というふうにインテリ市民層の誠実な倫理観を代弁する状況とも重なる。

> ここでは，「文明化」の概念には触れられてはいなかった。そして，ドイツ人の「文化」の観念は，この説明ではずっと遠くから出現するにしかすぎない。しかし，われわれには，その説明から － これらすべての考察からもそうであるように － 「文明化」と「文化」のドイツ的対立が単独で存在してはいなかった，ということが分かる。それはより大きな状況の一部であった。それはドイツ人の自己像の表明であった。さらにまた，それは，最初は特別な階級の間で，専らではないにしても，圧倒的に存在していた － それからドイツ国民と他の国民との間でも存在するようになった － 自己正当化の違いや，性格や全般的行動の違いを指した。[12]

これに対してフランス人の「文明化」（*civilisation*）の歴史はどうであったか。これについてもエリアスは豊富な例を挙げながら，ドイツとは違うフランス独自の「文明化」の変遷について興味深い見解を披瀝している。ここではフランスにおける市民社会と宮廷社会の壁がドイツに見られるほど高くはなかったということが重要である。ルイ 14 世の絶対主義が確立し，フランスの宮廷文化が支配的になる頃には 2 つの異なる階級，すなわち市民層から成るブルジョワ階級と宮廷貴族階級の間には相互交流があり，少なくとも共通の価値観が存在したことをエリアスは強調する。つまり，フランスのブルジョアはドイツのそれとは違って，政治活動も活発で，早い時期に政治･行政の中枢を担っていたことを意味する。それは，ルソーのような過激な啓蒙思想家でさえ上流階級と接触があったことからもある程度察せられる，とエリアスは言う。宮廷貴族と市民層の歩み寄りという点で多少イギリスの例と似ているのではあるが，そのことがとりわけドイツとは異なる人格構造と国家像をフランスにもたらしたことで大きな意味を持つ。エリアスは，それに関連して，たとえフランス革命でブルボン王朝は打倒されても，フランス人の宮廷人的な国民気質はその後も，食習慣，行儀作法，人間の振る舞いや行動様式の点で長く続いたと解釈する。[13]

こうした形で宮廷貴族と密に接することができたフランスの中産階級には独自の「文明化」の概念が芽生え，ちょうど貴族に反発したドイツの中産階級インテリ層独自の「文化」がそうであったように，それが彼らの行儀作法や趣味や文学を特徴づけることになる。「文明化された人間」（*home civilité*）から社会一般の特徴である「文明化」を引き出し，フランスの中産階級にそのような知的風土を定着させた人物としてエリアスはミラボーを挙げている。彼の社会批判はドイツ知識人のそれのように過激なものではなく，現存の社会制度の枠内での改良を目指すものであった。エリアスはフランスの中産階級知識人の人格構造を次にように説明する。

> ルソーのような少数の局外者は別として，彼らは支配的な秩序に，根本的に違った理想やモデルを対置するのではなく，そのような秩序の理想やモデルを改良した。「虚偽の文明化」という言葉の中には，ドイツの運動とは根本的に違ったものが含まれていた。フランスの著述家たちは，「虚偽の文明化」は純粋な文明化と置き換えられるべきであるということを示唆していた。彼らは「文明化された人間」（*home civilitè*）に，それとはまったく違う人間のモデルを，ドイツのブルジョア知識層が「教養人」（*gebildeter Mensch*）という言葉や「人格」という観念でもってそうしたように，対置したのではなかった。その代わりに，彼らはそれを発展させ，改良するために宮廷のモデルを取り上げた。彼らは，直接的であれ間接的であれ，宮廷社会の広いネットワークの内部で自ら書き，闘っていた批判的知識層に語りかけたのであった。[14]

エリアスの社会学的分析の独自性は，こうしたフランスの知識層の人格構造，もしくは「われわれ像」を単独に，また分離して扱うのではなく，それを，同時代の他の社会現象と相互に関連するものとして捉えるところにある。つまり，ある時代の人間集団の特定の精神性や文化的傾向は常に広いネットワークの中でその時代の支配的な政治・経済思想もしくは信仰体系や道徳規範と連動しながらそれ自体の力を持つ。ここでは，17 世紀の絶対主義時代に宮廷貴族の対抗勢力として，その微妙な共生関係を通じて台頭してくる中産階級のエトスが，アンシャン・レジームの代表的な経済思想である重農主義と調和していたとするエリアスの見解に注目する必要があろう。が，この関係も決して単層的ではなく，多層的であり，異なる

スポーツ・チーム間の複雑なゲームのような様相を呈する。重農主義の中ではテュルゴーを代表とする改良主義的官僚政治が有力であるが，その背後にさまざまな党派の知識人や商業ブルジョアがいる。また改革を求める人々の中には，フォルボネのように税制や国家機構の変革を好む保護貿易主義者が自由貿易を擁護する重農主義者に対して論陣を張る。さらにまた宮廷内にはあらゆる改革に反対する保守的で世襲の「法服貴族」と呼ばれる高級行政官もいる。したがって，ルイ 14 世のように絶対的な権力を持つ国王といえども，自らの政治的手腕を発揮し，権力を維持するには，このような複雑な状況で，さまざまな勢力を戦わせながら政治的勢力の均衡化を図る能力が要求されることをエリアスは強調する。換言すれば，独裁者には，内部の競合する権力集団を永遠に戦わせる能力が必要不可欠となる。さらにそれは独裁者自身の資質というより，むしろ全体的な「相対配置」（編み合わせ関係）の力学が生み出す現象であり，権力者自身も常にその圧力にさらされる。

こうして，フランスの中産階級知識人は，ドイツの知識人の活動領域が精神文化のみに限定されたのに比べて，宮廷との相互依存関係を通じて早い時期に政治的，経済的な行為に従事し，さらにそれによって，自らを文明化する（宮廷文化を吸収し，かつ宮廷社会に影響を及ぼすことで）重要な契機を見出すが，エリアスは，さらにその拠点を － ドイツでは大学が中産階級インテリ層の拠点であった － フランスの宮廷社会と不可分の関係にあった重農主義の思想に置く。

エリアスの解釈によると，この「文明化」の方向を示唆するケネーの重農主義の理念はまず，生産と商品の再生産のサイクルを重要視する。したがって，専制君主が恣意的に国家の経済を支配するのではなく，人々が理性に基づいてこの自然の法則を理解することが推奨される。それはいわば啓蒙主義的な自然経済思想であり，これが宮廷社会で支持されることになる。かくして，中産階級の求めた「文明化」は重農主義の理想に合致する。換言するなら，社会的現象も自然現象もすべて秩序のある過程の一部を成し，それに逆行する政治や法律は文明化されていないことになる。

ミラボーにとってこの理論と理想を実践することこそ「文明化」を推進することであり，それは政治・経済・法律・行儀作法などを含む人間の全体的，総合的発展を含むものであった。したがって，「文明化された」政府は野蛮主義と退廃を防止し，そのような漸進的改良によって人々を教化しなければならないのである。それは貴族の文化を完全に乗り越えるもの

ではないにしても，最終的には言葉や行動様式やマナーなどにおける「文明化された」貴族の伝統的な価値観に基づいた改良主義の受容を意味する。

かくして，フランス語の「文明化」という言葉は，その出発点では国内における階級対立が原因でややドイツ的な「文化」の概念に近いものがあったが，ブルジョアの政治的・経済的台頭によって，またそれが宮廷文化を摂取することによって，フランス革命でさえその元来の意味を消せないほど，フランスの国民的性格を強く刻印づけるものになった。ところが，その言葉はナポレオンのエジプト遠征の頃には，「野蛮」に対抗する絶対的な意味での「文明化」に固定化され，さらにはその言葉の過程的な意味合いも忘れられ，「われわれは文明化されている」という優越感によって静的なものとして完結した，とエリアスは解釈する。つまり，エリアスは，これを基点に西洋諸国が文明化を意識し始め，やがて自分たちの行動様式を含め，科学やテクノロジーや芸術にも優越感を持つようになったことを問題視しているのである。ドイツの場合もまた，「文明化」と「文化」の対立がドイツ人の国民的性格に多少分裂的な影響を及ぼしたとはいえ，一方では貴族階級が軍事的官僚主義を，他方では中産階級が精神主義を掲げることによって，微妙な差異やニュアンスを含みながらも同じく西洋中心主義的なイデオロギーが固定化されたと見てよかろう。

こうした状況は，「文明化されていない」原始的な社会（エリアスはその表現を避けて，より単純な社会と呼んだ）における「文明化されていない」行為や振る舞いが，徐々に一定の道徳的枠組みをはめられ，合理性の名の下に一元化されていく方向と重なる。つまりエリアスの言い方によれば，それは，昔許されたことがますます禁止される過程である。西洋社会において人間の粗雑な，あるいは動物的な感情や欲望がどのように規制され，それが良いマナーやエティケットとしていかに規範化されるかという問題は『文明化の過程』の第２部の課題であり，それはいくぶんミシェル・フーコーの議論を髣髴させる。

（3）西洋における行儀作法の発展とその歴史

どのような社会理論も政治思想もそれが説得力のある議論を展開するには理論的仮説を裏づけるための経験的資料が必要となる。その両方は機械的に分離されるものではなく，有機的な連続体になることによって理論的正当性を強化するが，社会学者や社会科学者の多くはまずいわゆる客観的

な資料として，統計や歴史的記述や文学作品からの引用などを利用する。その量や数が多ければ多いほど理論化作業が成功するわけではないが，具体的な事例の提示や数量的な例証はいずれにせよ社会科学の研究においては不可欠な作業である。たとえば，商品のメカニズムの具体的な分析がなければ － それが絶対的に正しいかどうかは別にしても － マルクスの剰余価値学説に基づく唯物史観は少なくとも説得力を失うであろう。またプロテスタンティズムと資本主義社会，合理的精神と官僚制の関係を説明する根拠が希薄であれば，ウェーバーのモデルとしてのいわゆる「理想型」は信頼度の低いものになるかもしれない。エリアスの場合も，行儀作法の変遷過程を具体的に示す資料がなければ，『文明化の過程』における彼の社会学的理論が緻密なものに発展することはなかったであろう。

エリアスはここで中世からルネッサンスにかけて変化していく西洋人，とりわけ上流階級のマナーやエティケットの概念を，エラスムスの『少年礼儀作法論』，デ･ラ･カーサの『ガラテオ』，カスティリオーネの『廷臣論』，カクストンの『礼儀作法書』，ターンホイザーの『宮廷礼式』，ド・クルタンの『新礼儀作法論』など当時書かれた数多くの礼儀作法書を引き合いに出しながら，詳細に説明している。[15] そこでは，人々の感情や行為や反応は，理論家が捉えがちな「無菌の状態で，まるで幽霊のように生きている人間」としてではなく，具体的な日常生活を送る存在として描かれている。実際，エリアスは「日常生活の概念について」という論文で，日常生活はそれ自体で自律的に存在するものではなく，社会層の全構成要素，つまり社会の権力構造の全体要素であることを強調し，さらには，『文明化の過程』の目的は行儀作法，感情的・肉体的表現，食事のマナーの諸側面がいかに社会構造や国家形成と関係があったかを示すことであった，と述べている。[16]

第２部ではこうした観点から，人間の振る舞い，行動様式，食事のマナー，ナイフやフォークの使い方，服装，話し方，生理的行為などが取り上げられ，それらが文明化を通じていかに一定の規範へと統合されていくかが論じられている。ここでは，エラスムスの「少年礼儀作法論」における礼儀の概念，フォークの登場，エティケットの機能の変化，男女関係の変遷，暴力の規制などの課題に焦点を当てたい。

エリアスは，「文明化」の概念が人々の日常的行為の中にどのように浸透していくかを立証するために，まず上流階級の間で規範化される上品で洗練された行動，すなわち西洋の「礼儀」の具体例をエラスムスの『少年礼儀作法論』にたどる。エラスムスはここで食事のマナーや服装や会話な

どについて上流階級の少年が人前でやってはならないこと，つまり禁じられるべき下品な行為についてユーモアを交えながら論じているが，エリアスが言うように，現代人にとって奇異に感じられることが当時しばしば許されていた。たとえば，食事中に吐き気がしたら食物を吐き出してもかまわないこと，あるいは屁を我慢するのも健康に良くないことなどがそれである。これは単なる個人的な習慣の違いではなくて，自然に起こる生理現象の無理な抑制を良くないと見なす社会全体の価値観の表れであり，彼らの行動がまだ文明化の途上であること，つまり，彼らは（おそらくその点では現代のわれわれもまた）徐々に文明化されつつあるが，まだ完全には文明化に到達していないということを意味し，それは同時にエリアス自身の過程社会学の重要な理論的根拠となる。

フォークの出現（エラスムスの時代にはまだそれがなくて，人々は共同のナイフやスプーンを使っていた）についても同じことが言える。ここでのエリアスの分析とそれに基づく結論は興味深い。エリアスによると，手や指を使って食事をすることを禁止するのは病気の感染の危険性とは直接関係はない。つまり，フォークの使用は手で食べることの嫌悪感の体現である。そのタブーは，不快，嫌悪，恐怖，恥が様式化され，構造化されたものであり，特定の条件の下で社会的に育成され，再生産されるものに他ならない。かくして，少数者にとってタブーであったことが多数者にも広がる。ここでエリアスが提示した重要な問題は，何世紀にも及ぶ社会過程が，嫌悪感の基準の上昇という点で個人の短い生活空間で再現されるということであり，とどのつまりそれは人間の社会発生と心理発生の基本法則に収束する。

これとの関連で，次に宮廷社会の出現と並行するマナーやエティケットの機能とその変化に言及することは重要である。なぜなら，食事のマナー，話し方，感情の自己規制など文明化に関連する一連の行動様式の規範化は単に西洋社会の特定の人間集団，とりわけ都市の上流階級に見られる固有の現象ではなく，より大きな社会単位である宮廷社会の権力構造と人間関係を支える力学になるからである。特に，ルイ 14 世が絶対的支配者として君臨する 17 世紀のフランス宮廷社会では，経済的な富よりもむしろマナーやエティケットが宮廷内での貴族の社会的地位を決定づける要因として機能することをエリアスは分析する。宮廷人は，宮廷という体制の枠内で生きるには，権力者やその周辺にいる中枢集団がどのような人間関係を持っているか，あるいはどの集団が権力の座から遠ざかりつつあるかを見

抜く知識を必要とする。宮廷のしきたりや習慣や行儀作法を勝手に変えることは，反体制的と見なされ，自らの社会的地位や名誉の失墜にもつながる。こうした社会的圧力にその体制内の集団がすべてさらされることになる。国王さえもこの圧力から逃れることはできない。自分の感情を抑え，相手の顔色を窺い，マナーを守ることは無意識のうちに宮廷人の性格に植え込まれる。

かくして，地位や名誉を権力資源とする特別な社会構造とそれにふさわしい精神構造ができあがり，人間の相互依存の連鎖の拡大によって両方が不可分な関係を保つのである。宮廷で暮らす個々人は，たとえば国王として，英雄として，蔵相として，あるいは宮廷詩人や音楽家として個人的才能を持つかもしれないが，彼らはこのような社会構造を生み出す力学に吸収されてしまうし，そうした社会の出現でさえも彼らが予想したことではない。人間集団が相互に織り成すこの特殊なネットワークを分析し，その発展過程に言及することが，『宮廷社会』におけるエリアスの目的であり，その方法はすでに『文明化の過程』の中で示唆されていた。

中世からルネッサンスを経て近代初期にかけて大きく変化した男女間の関係に言及することも，西洋社会におけるマナーの変化や発展と関係がなくはない。ここでは，日常生活のレベルで，たとえば下品な食べ方や見苦しい服装などに対して示される嫌悪感や羞恥心が男女の性的な関係においても段々と上昇していく過程が分析されている。ここでのエリアスの分析方法は『性の歴史』におけるフーコーの方法に似ている。少なくともわれわれは，どうしてヴィクトリア朝のイギリスでは禁欲的な性の規範（性的ピューリタニズム）が生まれたのか，なぜ昔は異常ではなかった性的関係が今では異常と見なされるのか，そうした変化は人間によって意識的になされたのか，あるいは自然に起こったのかと尋ねればよい。もちろんわれわれは，いわゆる異常な行動様式や性関係が現代社会からすべて消えたと信じているわけではない。エリアスが言うように，そのような行為は，現代の文明化された社会ではむしろ社会生活の「舞台裏」に隠されるのである。その場合，外部からの圧力（外的束縛）［*Fremdzwang*］と自己の内面に形成される道徳的自我／超自我（内的束縛）［*Selbstzwang*］が「罪の意識」を倍化させ，また心の審判としてわれわれを監視していることになる。

端的に言えば，中世の人々は性に関しておおらかであったというより，むしろそれに対してあまり「罪の意識」を感じることがなく，中世という社会構造に応じて，その必要性もなかったということであり，そうした状

況を指摘したことにエリアスの社会分析の意味がある。エリアスは，その頃はまだ男女の性的関係にそれほど制約がなかったこと，子供も両親の性的行為を見ていたこと（当時は子供の部屋がなく，子供は両親と同じ部屋で寝ていた），娼婦が軽蔑されてはいたが，有力者の宴会などに呼ばれてそれなりの社会的役割を果たしていたこと，さらには子供も娼婦の生活を知っていたこと（エラスムスの本ではそれが隠されてはいない）など珍しい例が示されているが，そのこと自体に特に意味があるわけではない。重要なことは，長い歴史の過程でマナーやエティケットの基準が変わったように，彼らの性の意識も変化したということ，つまりエリアスの言葉で言うなら，羞恥心や嫌悪感のレベルが進歩したということに他ならない。

宮廷社会の出現はまた，エリアスの見解によれば，男女間の権力配分が徐々に女性に有利に傾く契機でもある。周知のごとく，中世の宮廷恋愛歌では身分の高い女性は吟遊詩人たちの崇拝の的になるが，こうした変化は急に起きたのではなく，その過程では明らかに暴力的な行為の必然的な抑制が必要条件となる。それは同時に，多数の集団による軍事的対立が減少し，絶対的な君主の下で社会が１つの国家単位へと統合され，かつそれを背景に市民層の間でも産業や商業が活性化する過程である。

社会的動乱や激変が減少し，それにともなって人間の精神が穏やかになる過程をエリアスは「和平化」という言葉で表現したが，そうした相互依存関係，編み合わせ関係を生み出した社会的変化を彼は「戦士の廷臣化」とも呼んだ。一般にわれわれは宮廷恋愛物語に登場する騎士を理想化するが，エリアスは騎士が最初からそのようなエトスを持っていたわけではないことを強調する。

元来，騎士は領主との主従関係を軸に軍事的活動によって生活の基盤を得るのであり，小規模であれ戦争がなければ，あるいは戦争による戦利品の獲得や領土の拡張がなければ，生活を維持することはできない。そういう意味では，彼らは日本の戦国時代の武士と似ている。戦争がなくなり，社会が安定すれば，彼らが使用していた武器や武具は当然不要となる。こうした変化は，同時に軍事闘争や武器がやがて騎士の馬上試合やフェンシングのようなスポーツもしくはスポーツ用具へと様式化され，昇華される歴史的過程を示している。かくして，宮廷社会の出現とその発展はまさしく騎士が廷臣へと転身せざるをえない社会状況と彼らの人格構造の変化を象徴するものである。というのも，宮廷社会では，騎士は人前で，とりわけ身分の高い女性の前で暴力を振るうことは許されなくなるし，自制を欠

いた行為は彼らの社会的地位の失墜を意味するからである。エリアスは，吟遊詩人によって歌われる恋愛詩がまさにこうした社会変化，およびそれにともなう精神構造の変化の文学的表現であると捉える。

これに関連して，エリアスは初期の騎士たち，とりわけ経済的に恵まれない騎士集団がいかに乱暴であり，強盗まがいの略奪行為を繰り返していたか，また戦争では捕虜になった，身代金の取れない身分の低い兵隊をどれほど残虐に扱っていたかについて述べている。このような状況が国家統合へと向かう「和平化」の長期的な社会過程の中で宮廷社会の非暴力的な風土を，あるいはそれに続く産業ブルジョアジーの合理的なエトスを生み出すことになるが，彼は和平化にともなう権力バランスのこうした変化が西洋近代社会のみならず，古代社会にもあったことを，豊富な資料に基づいて立証している。

その代表的な論文は「古代ローマにおける変化する男女間の権力バランス」である。ここでの議論の中心は，経済的繁栄を成し遂げた帝政期のローマ社会では，一部の上流階級の女性に限定されていたとはいえ，それまで禁じられていた政治的発言が女性にもある程度認められたり，財産権や離婚権さえも与えられたりしたことであり，かつその文学的な表象として，身分の低い若者が高位の既婚女性に恋愛歌を捧げる習慣が生まれたということである。[17] エリアスはここで，時代は異なれども，和平化にともなって中世の宮廷恋愛詩が発生したのと同じ社会状況を見ているのである。

文明化にともなう洗練された行儀作法の確立と規範化，和平化と並行する女性の地位の向上は，いずれも中世初期の封建的騎士社会からルネッサンス以降の宮廷社会の出現時にかけての西洋社会の構造的特徴となるが，さらにそれを促した要因として暴力規制の問題に触れなければならない。これは，明らかにエリアスがフロイトの心理学に影響されたことを物語っている。原始的な欲望（攻撃本能）「イド」（id）を持つ主体が，自己の内面に審判者としての「自我」（ego）を作り，さらに道徳的良心である「超自我」（superego）に達するという人間の精神的成長過程は，個としての人間が共同体での生活を通じて，他者から学び，その経験を通じて動物的本能や衝動による自己破壊，文明破壊を免れるという社会行動の過程と重なる。しかし，エリアスの場合，こうした人間の心理的図式をフロイトのように個人の内面生活に限定するのではなく，あくまでも，他者との相互依存を繰り返しながら発展する集団としての人間の心理発生に関連づけたところにその特色がある。エリアスは『文明化の過程』の第２部で中世の

人々のさまざまな暴力行為や残酷な娯楽に言及しているが，それは昔の人（文明化されていない人）が乱暴であり，現代人（文明社会に住む人）がそうでないということを強調しているのではなく，ここでもまた人間の羞恥心や嫌悪感のレベルが徐々に前進していく過程を　－　それが逆流するという可能性を含めて　－　分析しようとしているのである。こうした前提がなければ，どうして現代社会でホロコーストや民族浄化のような悲劇が起こり，なぜそれが批判されなければならないかが理解されないであろう。また同時に，真剣に戦争を取り除こうとしている国（最も文明化された国）が最大の武器生産国・輸出国になりうるという文明化の過程における逆説や皮肉も生じるのである。[18]

生物兵器や核兵器が大量殺戮を可能にし，少なくともそれが人間社会全体の破壊につながることをだれもが知っているからこそ，現代の文明社会では核開発やミサイルの保有は国際的な非難を浴びることになるのである。エリアスがたびたび指摘しているように，そのような悲劇が少なくとも意識されていない社会では戦争はごく日常的な事件であり，特に近代産業のない古代の国にとってもそれは財産を獲得する格好の機会でもあった。古代ギリシャにおける都市国家間の戦争，カルタゴを収奪したローマのポエニ戦争などはいずれもこうした脈絡で理解されなければならない。つまり古代ギリシャもローマも基本的には「戦士社会」であった。同じことは戦闘集団としての騎士階級を抱えた小規模な国王や領主が対立抗争を繰り返していた中世についても言える。こうした社会構造や社会条件が理解されてこそ，中性の人々の暴力行為や残酷な娯楽は理解されるのであり，そういう意味では，現代人からすればたとえ彼らの行動が非難されるべきものと見えたとしても，彼らの精神構造は社会構造と矛盾してはいなかった。

エリアスは中世の民衆の娯楽であった罪人の処刑，民衆のみならず国王や王妃も参列したといわれる猫の火あぶりなどの行事を暴力的な中世社会の例として挙げているが，これを引き合いに出しながら文明化の度合いが低い中世社会という像を提示することがエリアスの目的ではなかった。むしろエリアスが重要視したのは，こうした行為にもはや喜びや楽しみを見出せなくなった人間が，暴力的な闘争を，模倣的な闘争，もしくは模擬戦として別の空間に移し変えることによって，徐々に新たな次元の娯楽を見出すようになった過程である。換言すれば，文明社会に生きる人間にとって社会的圧力（外的束縛）と自己の内面的圧力（内的束縛）の支配から逃れ，自らの動物的欲望を完全に満たすことは不可能だとしても，それを少なく

とも昇華することによって新しい生存空間の創造を人間は習得するようになったとエリアスは解釈したのである。中世の暴力的な行為や残酷な娯楽がどのようにして現代のスポーツや芸術や文学などに発展したのかという問題がここで論じられることになる。

われわれが生活している21世紀の社会ではスポーツや芸術や音楽の種類や傾向がさらに増大し，発展していることは言うまでもない。これらの領域のグローバル化も昔の人には想像もつかないほど進んでいる。文学や芸術を中心としたいわゆる情操教育が人間の精神的成長の重要な手段としてさらに評価されることがあっても，それが否定されるような事態はもはやなかろう。文明化された社会では，整備された経済体制や政治制度，もしくはそれを下支えする優れた科学技術が必要であることは言うまでもないが，むしろその安定は文学や芸術の進歩によって保証されるのであり，エリアスの文明化の過程の理論は，この点を強調していることでも評価に値するのである。つまり，前述したように，分業や協業がさらに進む人間社会の総合的な機能化の問題を考える場合，政治や経済や科学や芸術をそれぞれ切り離すことはできないのである。とはいえ，安定した文明社会の産物を人間が享受できるには，肉体的暴力と徴税権を独占する近代国家の出現と発展，すなわち国家形成の歴史に触れなければならない。これが『文明化の過程』の第3部の中心課題であり，それは行儀作法の発展と不可分である。

（4）国家形成の歴史と文明化の過程の関係

一般にわれわれは，洗練された行儀作法，優れた倫理観や道徳観を持つ個人や市民が存在することを前提として近代国家が成立したのか，あるいは逆に国家という枠組みがあって初めて個々の人間は法律や道徳を守るようになったのかという疑問を発しがちである。それはまた個人と社会はどちらが先かというまさに「ニワトリと卵」の関係を尋ねる問題に似ている。それは実際、多くの社会学者が長年悩んできた問題であり，また同時にエリアスの課題でもあった。その際，彼は常に「相互に依存する人間－社会」という観念から出発した。これはつまり，人間は生まれると同時に他者との関係を持つということであり，敷衍すれば，人間の集団的生活が同時に国家単位と同レベルの生活次元に発展するということである。それはまた「国家形成の零度」はないというエリアスの表現に収約されよう。

第3部で展開される中世から近代にかけての国家の誕生という歴史的過

程に関するエリアスの説明はごく常識的なものである。が，それが社会学の問題として語られ，関連づけられる場合，長期的視野によって分析される国家形成の過程が逆に歴史的な意味を持つ。ここでも分業と協業という新たな生産方法や産業形態の変化にともなって生じる国家機能の分化が人間集団の相互依存の拡大に依拠しており，またそれは個人の予想できない，無計画の過程であったということが理解されなければならない。たとえば，人間が本来的に好戦的であり，かつ攻撃的であったから軍事農業的戦士国家が成立したわけではないし，また人間が生まれつき合理的な思考能力や将来への予見能力に恵まれていたから，科学技術が高度に発展した産業国家が生まれたわけでもない。人間は偶然そのような状況に巻き込まれたのであり，そのことがさらにそのような資質を必要とさせたのである。

エリアスはそうしたある種の社会力学に「法則」とか「秩序」という構造主義的響きの強い言葉を当てたが，それらは，むしろ国家形成の過程で起こる，「地位争い」，「排除闘争」，あるいはその結果として生じる国家の「肉体的暴力の独占」，「租税権の独占」というより具体的な概念で捉えるほうが分かりやすい。それはスミスの「見えざる手」でも，ヘーゲルの「絶対精神」でも，マルクスの「階級闘争」でもない。それはさまざまな人間集団が相互依存し，そのネットワークが拡大することによって進行するある種の社会的ゲームでもある。それはまた，比喩的な表現を使えば，国際的な規模で展開される複数のスポーツ・チームの戦いであり，あるいは複数の加盟国から成る国際的な機関の活動でもある。グローバルな状況では，その結果は予想もされない方向へと向かう。スポーツ・チームが増えれば増えるほど，また多くの国家が国際的な政治の場に参加すればするほど，権力配分の微妙な変化によってその動向を予想することがいっそうむつかしくなる。こうした状況を念頭に置きながら国家形成の過程をたどっていくと、エリアスが第３部で意図したことが分かりやすくなる。

ここでもエリアスは国家の本質とは何であるかとか，近代国家はどうあるべきかといういわゆる政治学的なレベルの議論は避けている。彼はまた国家についてのユートピア的な，あるいは悲観的な見解を提示しているわけでわけでもない。国家の存在意義を否定し，国家の消滅や廃止を階級闘争の最終的局面として考えていたマルクスの見解をエリアスは疑問視してはいたが，特にマルクスの国家論に対する積極的な批判を展開したわけでもなかった。むしろ，人間社会の構造的な変化を長期的視野によって捉えようとしたマルクスの方法に彼は共感を示すこともあった。[19] おそらくそ

れは経済組織の変化，生産手段や生産方法の変化に呼応する中央統制組織の，もしくは国家機能の変化を系列的に歴史的な流れに沿って捉えようとしたエリアスの方法にも窺われよう。それゆえ，エリアスは「肉体的暴力の独占」と「徴税権の独占」というウェーバー的概念を静態的・固定的なものとしてではなく，「排除闘争」や「地位争い」を通して機能的に変化するものとして捉えようとしたのである。したがって，封建制国家から絶対主義国家を経て国民国家に向かう国家形態の変容は，より質の低いものからより質の高いものへというより，その支配構造と構成要素の点で，より単純なものから複雑なものに移行するのである。それは同時に，社会構造と人格構造という点での社会の主要な担い手，たとえば騎士階級，宮廷貴族階級，ブルジョア階級の行動様式と連動する。しかし，それはどの社会が良くてどの社会が悪いかという価値判断とは関係がない。

機能的民主化という点では権力資源は，たとえば，少数のエリート貴族からより多くの市民や労働者に移るが，次の段階で発展する社会構造が必ずしも以前のものより良いという保証はない。また感情や情動や欲望の自己規制の面では現代の産業社会は騎士社会よりも圧力が大きい。したがって，国家形成の過程を分析する場合，支配者がある個人から別の個人に代わったかという問題より，社会の支配構造の根幹である「独占のメカニズム」がどのように変化したかということが重要になり，文明化の過程との関連では行儀作法を支配する層がどのように変化したかということになる。

こうして，エリアスの「独占のメカニズム」は国家形態の変遷を分析する上で重要な社会学の概念を提示する。端的に言うなら，それは長期的な過程を経て人間社会の支配形態がより合理化されるということ，少数の集団から成る中央集権的組織によって，つまり国家によって，さらにはより分化した，機能化された部門によって統合されるということである。それは求心力となって作用する国家統合の力学である。おそらくそれは，マルクスの概念では，大小さまざまな生産組織が経済の必然的法則によって最も強大な少数の資本家の下に統合される過程であり，またさらなる利潤を追求するためにブルジョアがその市場をグローバル化せざるをえなくなる自己圧力でもあろう。もちろん，そのような運動が対抗勢力によってつぶされることもありうる。その場合，その力学は遠心的に働き，統合された組織体が，日本の戦国時代の群雄割拠のように，小組織に分裂することになる。「独占のメカニズム」は必ずしも単線的，直線的に進行するわけではないが，概ね支配形態は，主導権争いを経て必然的に単一組織による合

理的統合という道をたどる。

エリアスは「独占のメカニズム」の特徴について「最初に自由競争，排除闘争の局面がある。それは，資源がますます少数者に，そして最後には1人の手に蓄積されるような傾向をともなう…2番目に，中央集権化され，独占された資源をめぐる支配権が個人の手から，どんどんと数を増してくる人々の手に移るようになり，最後には全体として相互依存する人々の網の目の機能となるような局面，すなわち個人的な独占が公的な独占になるような局面がある」[20]と述べ，さらに国家の独占形態について以下のように結論づける。

> 現在のところ国家的境界に限定されている肉体的暴力と租税を独占する組織がなければ，「経済的」利益のための闘争を，「経済力」の行使や，その基本的規則の維持に限定することは，個々の国の内部でも相当な期間に及ぶとなると不可能であろう。[21]

このように，エリアスの「独占のメカニズム」は，とりわけその「自由競争」の原理をマルクス主義的な概念から捉えると誤解される可能性がある。彼がここで示唆しているのは，国家による暴力独占と租税独占が前提条件としてあるからこそ，経済的な領域内での自由な競争がある程度可能になり，保証されるということであり，換言すれば，そのような国家的な統制力が働かなければ，逆に人間社会は完全な支配－被支配の関係に固定されてしまうということであろう。したがって，権力資源が単独の人間の支配から複数の人間の支配に移り変わる過程は，国家機能の共同管理というより民主主義的で平等な政治形態への移行と見なすこともできよう。この国家による独占形成はむしろ文明化を促す防御壁のような役割を果たすものになるのであろう。

ここで注目されるのは，国家的統合というより高い次元の社会構造への変化を生み出すメカニズムが，羞恥心や嫌悪感のレベルの前進にともなう文明化された行動様式への統合，つまりより高い次元の心理構造への変化を生み出すメカニズムと一致するということである。敷衍すれば，それは少数のエリート（高位の僧侶や宮廷貴族や一部上層市民）が独占していた経済的，文化的権力が，相互に依存する人間集団のネットワークの拡大によって，また社会的習得や摸倣を通じて一般市民に受け継がれ，発展させられていくということに他ならない。つまり，1人の専制君主や独裁者が恣

意的に国家機構を操作することができなくなるのである。これはエリアスの文明化の過程の理論を理解する際に１つの重要な鍵となる。

エリアスは第４部で「文明化の過程の理論のための概要」と題して相当長い議論を展開している。これは文字通り本書の理論的骨子をさらに明確にするために書かれているものであるが，一見するとそれぞれ分離しているような印象を与える第１部から第３部までの個々のテーマが，実は相互に関連していることを示唆するという点で重要である。またそれは，『文明化の過程』で扱われたテーマの有機的関連性を社会学的図式に凝縮し，再度読者に提示するという点でも効果的である。実際，ここで論じられているテーマは本書以外のエリアスの著作でも繰り返し議論され，かつ発展させられていると言えよう。その中でも文明化の過程の理論との関係で無視できないのは「自己束縛に向かう社会的束縛」と「減少する差異と増大する多様性」であり，そこでエリアスが強調した点をここで再度取り上げ，その意義に言及してみたい。前者ではだいたい次のようなことが論じられている。

（1）人間の相互依存が生み出す社会組織や制度は結果的には無計画であり，その力学は個人の意思や理性を超えている（2）文明化とは合理的でも非合理的でもなく，それは盲目的に運動し，人間関係のネットワークの自律的力学によって動かされる（3）西洋社会では社会機能の分化と競争が激しく，これが人間の相互依存を強化し，その結果，人間の感情や情動はいっそう抑制され，統一される（4）個人の感情抑制はほぼ無意識的，自動的に行われ，これが文明化の過程における心理的変化となり，さらにそれが個人から集団へと広がる（5）感情の自己抑制は必ずしも人間を幸福にせず，人間は機能萎縮に陥ったり，孤独感にさいなまれたりして精神障害にいたる場合もある（6）国家の暴力独占は一種の社会機構となり，人間同士の自制は個人内部の自制に変容する（7）西洋の文明社会に暮らしている人間の心理的困難は，より単純な社会で暮らす人間のそれより大きい。（8）西洋社会におけるこうした感情規制は，同様の機能分化が見られるどの社会にも起こりうる。[22]

エリアスが指摘するこのような現象がすべて20世紀の後半から今日までの社会に当てはまるかどうか疑問ではあるが，そのいくつかは文明社会固有の問題を考える場合，無視できないものである。その１つは，国家の暴力独占である。それは，今もなおあらゆる国家が私的暴力独占に対して，とりわけ国際的なテロリズムのような暴力に対して，「文明化された社会」

の安全を保証するために，戦わざるをえないことからも分かる。グローバル化する現代世界におけるこうした国際的な暴力は，国家にとって，その防止を他国との相互依存に求めなければならないというむつかしい問題を生み出す。ここでさらに注目すべき点は，エリアスが西洋中心主義的な文明観に依拠していないことである。『文明化の過程』の序文でもそうであったように，エリアスはここでもまた『文明とその不満』でフロイトが展開した議論を応用しながら，情動や感情の規制をほぼ自動的に強いられる現代の西洋人は，必ずしも幸福とはかぎらないし，むしろ彼ら固有の難問を抱えるかもしれないことを示唆しているのである。とはいえ，西洋の文明化された社会に見られるこうした自動的な感情の自己抑制が，同じく，他の地域でも ― もしそこに同じような機能分化が見られれば ― 支配力を発揮するというとき，エリアスはさらなる難問をわれわれに突きつける。それはもう１つのテーマ「減少する差異と増大する多様性」の中心的議論である。これは特にポスト・コロニアリズムという脈絡で，旧植民地と旧宗主国との権力関係において現在でもなお未解決の問題である。

ここでのエリアスの見解はだいたい次のようになる。西洋の主要な国々が自分たちの行動様式や感情規制を「差異」として維持する反面，このことが逆に「差異」をますます縮めることになる。西洋文明は西洋人に「差異」と「優越性」を与えるものの，同時に競争の圧力の下で世界の広大な地域に，自己基準に合致した行動の変化を要求する。西洋諸国は非西洋世界の多くを自らに依存させるが，自身もそれに依存する。西洋諸国は，諸制度を通じて，あるいは自身の厳しい行動基準によって，自身と植民地集団との間に壁を築く反面，西洋の行動様式や制度を植民地に広げる。こうして植民地と宗主国の社会的力，行動様式の差が縮まる。[23] さらに，次の引用にはこの問題にからむさまざまな問題が凝縮されている。

> 西洋的基準に向かう東洋やアフリカの人々のこの初期の変容は，われわれが観察できうる継続的な文明化の運動の最後の波を代表している。しかし，この波が上昇するごとに，同じ方向を目指す新たな，さらなる波が，その中で形を成しているのがすでに見られるのである。というのも，植民地地域で，より地位の低い，上昇しつつある階級として，西洋の上流階級に接近している諸階級は，その国の内部では基本的には今までは上流階級だからである。[24]

この引用は，全体の文脈から切り離してそれを解釈すれば，またとりわけエドワード・サイードの『オリエンタリズム』に賛同する読者の見解からすれば，典型的な西洋中心主義的イデオロギーと見なされかねない。さらにまた，植民地を支配する国を「悪」として，植民地として支配される側を「犠牲者」として考えれば，エリアスの立場は植民地肯定主義者のそれを代弁しているとも考えられよう。先ほどは，情感規制の強制という点で，西洋の現代人を否定的に捉えながらも，ここでは文明化の担い手としての彼らを肯定的に捉えるという形で，一見するとエリアスの見解は矛盾しているように思われるが，彼の「ゲーム・モデル」に依拠すれば，それほど矛盾はしていない。どのような場合も，異なる２つの組織や集団，あるいは２人の人間の間には，経済的，政治的，物理的な格差がある。しかし，エリアスが言うように，一方が他方に頼ることで，他方は一方に対して権力を持つことになる。男性と女性，子供と大人，主人と奴隷，労働者と資本家の関係がそうである。たとえば，ある状況で，とりわけ土地所有を基盤とした戦士社会では男性は女性に対して圧倒的な権力を持つが，高度に発展した産業社会ではかならずしもそうではない。人間の相互依存関係がますます複雑になり，諸集団のネットワークの規模が拡大すれば，また特に社会がグローバル化すれば，集団間の権力関係は一元的でない。社会構造の変化とそれにともなう精神構造の変化は，文明化の過程においては，権力配分の変化というエリアスの観点から現実に即した答えを得ることができよう。

『文明化の過程』において，特に独自の社会学理論を提示する際に，エリアスが一般の読者にはこれまであまり馴染みのない用語をいくつか使ったことは事実である。その理由の１つは，彼が長年，従来の伝統的な方法論を疑問視していたことである。そのために彼は古い用語をなるべく避けて，いくつか新しい概念を創造せざるをえなかった。そうした用語のうち，今もなおその定義が定着しにくいのは，前述したように，「形態／図柄／関係構造」（figuration）［*Figuration*］であろう。エリアスの社会学は最近，英語圏では「形態社会学」（figurational sociology）と呼ばれているが，それでもそれが意味するところはそれほど明確ではない。

ところで，「形態」を常に「編み合わせ」（interweaving）［*Verflechtung*］と共通関係にあるものと見なせば，そこに内包されている意味がやや分かりやすくなるかもしれない。つまり，それは，長期的な規模で展開される人間集団の相互依存関係によって次々に生み出される社会構造の変容体の

イメージと結びつく。元来，エリアスはゲシュタルト心理学の用語を使ってそれを「相対配置」(configuration) と呼んでいた。つまり，個と全体は切り離されるべきものではなく，両者には常に有機的な関係があり，全体と個は同次元で理解されるべきである，という考えが彼にあったと思われる。

いずれにせよ，こうした術語をテキストの文脈から分離して使うと，誤解や先入観が生まれることは事実であり，そのことに関連して，エリアス自身も釈明している。その際，彼は「形態」の概念を概ね次のように定義している。

(1) 人間は人間同士が形作る「形態」の中で発展し，それは多様な形となって，ある時は緩やかに，またある時には急速に変化する (2)「形態」にはそれ自体の力学あり，その中で個人はそれなりの役割を果すが，それは個人的な動機に還元されない (3)「形態」はダンスの比喩で理解されるが，それはダンスやロック音楽のように個人・家族・共同体・都市・国家へと広がり，同じダンスをさまざまな人間が踊る (4) 人間がいないとダンス（社会）は存在せず，個から全体へと広がるこのダンスには因果関係では説明できない。[25]

こうした特徴のいくつかは本稿でもすでに論じられたが，エリアスの意図は，自分自身で思考し，生まれつき理性や良識を持つ「哲学的人間」（まるで幽霊のようにこの世に出現する人間），つまり「閉ざされた人間」のイメージを打破することであった。換言すれば，常に変化流動する人間社会を，静止した，変化しないものに置き換えるという方法，つまり，哲学のみならず，社会科学や自然科学においても長い間，「正統」として認知されてきた方法を疑問視することであった。そういう意味で，「ダンスの比喩」は「閉ざされた人間」とは違う人間像，つまり，他者と交わり，価値や認識を他者と共有し，積極的に相互依存のネットワークに参加する「開かれた人間」(*homines aperti*) を想起させる。彼は社会学の使命を「神話の打破」と位置づけていたが，彼の用語の多くはこうした背景から理解されるべきである。したがって，「機能的民主化」(functional democratization)，「和平化」(pacification)，「議会主義化」(parliamentalization)，「スポーツ化」(sportization) などの術語は静態的にではなく，いずれも動態的なものとして，まさに「ダンスの比喩」として解されるべきである。つまり，それらは歴史的事実の終局としてではなく，その発展過程として，個人が常に複数の人間とともに織り成す変化の

ベクトルとして解されるべきである。

エリアスの社会理論の根幹を成す人間社会の長期的な発展過程の分析という方法は，彼がコント，マルクス，デュルケム，ウェーバーなどの古典的社会学者の影響下にあったことを示すものである。彼自身，彼らが残した社会科学の偉大な遺産を捨てないように警告していたが，1950年代はタルコット・パーソンズの機能的構造主義が全盛の時代であり，ハーバート・スペンサーに遡る歴史主義的な方法論は，社会ダーウィニズム的で西洋中心主義的なイデオロギーを助長するものとして敬遠されていたし，加えて，古典物理学の研究方法を社会科学の正当なモデルとするカール・ポパーの『歴史学の貧困』はエリアスの方法を古めかしいもの，流行遅れのものと思わせるに十分であった。ところが60年代から70年代にかけて起こった若者の世界的な反体制運動や反戦運動，東西のイデオロギー対立などは，人間の文明は一体どこに向かうのか，その根源は何なのかという根本的な問題をわれわれに突きつけることになった。さらに80年代後半から90年代にかけて起こった共産主義の崩壊，その後の民族対立，民族浄化の悲劇，ＥＵの統合，グローバリズムの進行，イスラム原理主義の台頭など，構造機能主義的な枠組みではもはや理解できない社会現象が数多く起こった。つまり，こうした問題に取り組むにはある程度の歴史認識がないと対応できない事態に現代世界は直面したといってよい。

エリアスの『文明化の過程』は，最良の解決策を提示してくれるわけではないが，少なくともこのような状況に立たされたわれわれに従来の認識方法（他者意識のない自分中心の思想，エリアスの定義に従えば，「われわれ意識のないわたし」の観念）を変える必要性を示唆してくれたといっても過言ではない。かといってエリアスは，Ｓ・ハンティントンが『文明の衝突』で展開する決定論的な世界の対立構造を思わせるような，また現代の高度に発達した産業社会を否定する多くの反近代の思想家が到達しがちな文化的ペシミズムにも賛同しなかった。なぜなら，彼は人類を，世代間の知の伝達によって常に未来を切り開く可能性を持った発展的な生物として位置づけていたからである。したがって，彼は，人類の社会を長期的な視野で見れば，その産物を機械的に「善」，「悪」，「規範」，「無規範」に分離できないし，現代人が解決不可能なことを古代人が解決することもありうることを何度か指摘していた。そういう意味では，エリアスは，いわゆる「文明」と「野生」に相互補完的な関係を示唆しているように見えるが，両者を対極化しながらも，そこに思考の共通性もしくは科学的論理の類似

性を見出すレヴィ・ストロースのような構造主義的な人類学者とはかなり違っていた。

『文明化の過程』とそこに集約されているエリアスの方法論はすべて評価され，賛同されてきたわけでない。実際，人類学者ハンス・ペター・デュルは一貫して「文明化の過程の神話」という表題の下にエリアス批判を続けてきた。[26] さらに，エリアスの発展的な過程概念の有効性を疑問視し，あるいは国家による暴力独占と人間の自己抑制の関係性は希薄であるとする社会学者からの批判もあった。いわゆる「寛容な社会」で育った現代の若者に見られる古い道徳的規範や社会制度への反抗から，エリアスの「文明化された行動様式」とその定義に反論する学者もいた。文明化の背後に潜む暴力性や破壊性をむしろ現代社会の特徴の一つと見なし，ファシズムやスターリニズムのような野蛮性をエリアスが指摘していないとする批評家もいた。[27]

そのような反論に対してエリアス自身も，たとえば文明化の過程とは対立する，もしくはそれと表裏一体である「非文明化の過程」のような概念を駆使して，さらにその理論的枠組みを強化した。加えて，「親の文明化」，「非形式化と文明化の過程」，「技術化と文明化」などのように，文明化の過程の理論をさらに発展させるような意欲的な試みも見られた。「親の文明化」では高度に発達した変化の激しい現代の産業社会で家族が，とりわけ親子が直面する問題が分析され，「永遠の家族」という普遍的で虚構的法概念が今や有効でないことが論じられている。すべての家族関係は過程であり，家族の役割も常に変化して新しくなり，それゆえ人間関係を構築するために，われわれは相互に意識的に働きかけざるをえないというのが結論である。[28] 換言すれば，文明化の過程とは「固定的な家族」がないことの証左である。

「非形式化と文明化の過程」における分析でも類似点がいくつかある。文明化は現代人に高度な感情規制や行動様式の基準化を要求する反面，現代人をしてそれを打破したい，タブーを破りたいという衝動を抱かせる。つまり，フォーマルなものをインフォーマルにしたいという過程が，文明化の過程の反作用としての「非形式化の過程」なのである。そこでの重要な問題は，現代人が，因習や古い道徳を否定し，その価値を変更することで，一方では満足を得ながらも，他方ではこうした自由な行動には常に圧力や失望がともなうということである。エリアスはこれに関連して，現代の若い男女間の結婚観に見られる因習打破を例に挙げているが，それは女性の

地位の上昇を示すものであり，同時にある圧力のもとで生まれる新しい男女関係の可能性であって，社会制度の崩壊ではないと論じている。[29]

「技術化と文明化」ではさらに重要な問題が提起されている。エリアスによると，技術化と文明化は同時に起こるものであり，そこには因果関係はない。科学技術の発展は感情の高度な自己規制をともない，同時にまた事故による予期せぬ死や重傷の原因にもなる。つまり，技術化と同時進行する「文明化の勢い」は逆に「非文明化の勢い」をも促すことになり，それをどう調節するかについては，人間はまだ学習の過程にある，とエリアスは言う。

テクノロジーの飛躍的な進歩によって，交通機関のみならず多くの国際的組織が世界的に広がるネットワークの中で統合されるが，そこにまた文明化の，ひいてはグローバリズムのむつかしい問題が生じるとエリアスは捉える。なぜなら，人間は自己集団と共同歩調をとりながらも，他の民族や人種とどのようにして価値観を共有するかという難問に直面するからである。技術化と文明化はかくして無計画のうちに進行し，ある種の圧力として重大な選択をわれわれに突きつけるのである。無計画で，終わりのない技術化と文明化という過程の中にいながらも，多くの社会学者や科学者は依然として世界を不変で，静止したものと見なしがちだとエリアスは警告する。したがって，哲学的永遠主義も歴史主義も今や乗り越えられるべき思想であるとエリアス言う。つまり，われわれは，人類の世界が創発的なものであり，未来の人類にはわれわれとは違う世界を切り開く可能性がある，という認識を持つ必要があることを彼は強調しているのである。エリアスの文明化の過程の理論が西洋中心主義でもなく，決定論的でもないことは次の引用で明らかである。

> われわれの前にある責務が人類の平和と組織的統一に向う作業であることをわれわれは今日知っている。この責務が現在の実験の時期から完成へとわれわれの生存中に前進することなどない，といった認識でもってこの作業に希望を失わないようにしよう。われわれのかなたへと向う未完成の世界で仕事に取り掛かることは確かに価値があるし，きわめて意味があるのである。[30]

エリアスが『文明化の過程』で提示した社会学の方法論とその問題意識は，エリアスと深く係わった社会学者たちによって今日まで引き継がれ，

発展させられてきた。その中でもスポーツ社会学の分野におけるエリック・ダニングの貢献には特筆すべきものがある。同じく，『アメリカの文明化の過程』を近年上梓したスティーヴン・メネルの研究も文明化の過程の理論がヨーロッパ以外の国でも応用できることを証明した点で意義深い。「非形式化と文明化」の問題もこれからさらに議論される可能性がある。この数十年のうちにグローバリズムとの関連で政治・経済的，文化的な面で大きな変貌を遂げているアジア諸国にもエリアスの理論が応用される可能性がある。[31] それはすべて『文明化の過程』が「閉ざされた人間」の最終的結論ではないことを示すものであろう。

1　本書の出版の経緯についてはStephen Mennell, *Norbert Elias*: *An Introduction*（Unversity College Dublin Press, 1992）p. 18 参照。

2　本書の日本語訳の出版は第 1 巻が 1977 年，第 2 巻が 1978 年である。ちなみにフランス語版はそれぞれ 1973 年（*La civilisation des mœurs,*）と 1975 年（*La dynamique de'l Occident*）である。

3　Norbert Elias, *The Civilizing Process*（Oxford: Blackwell, 2000）xiii.

4　Ibid., xiv.

5　Ibid., xiv-xiii.

6　エリアスのパーソンズ批判は *Über den Prozeß der Zivilisation* の第 2 版（Bern:Falke,1969）（序論）でなされた。

7　S. Mennell, *Norbert Elias*: *An Introduction*, p. 32 参照。

8　S. Mennell, *The American Civilizing Process*（Cambridge: Polity Press, 2007）pp. 24-5 参照。ここではイラク空爆に対するＳ・ソンタグの批判が引用されている。

9　「非文明化の過程」の概念については以下の文献を参照。Thomas Salumets, ed., *Norbert Elias and Human Interdependencies*（Montreal: McGill-Queen's University Press, 2001）pp. 32-49; J. Goudsblom, E. Jones and S. Mennell, *The Course of Human History*（New York: M.E. Sharpe, 1996）pp. 101-16.

10　Norbert Elias, *The Civilizing Process*, p. 30.

11　Ibid., p. 30.

12　Ibid., p. 30.

13　Ibid., p. 43.

14　Ibid., p. 35.

15　これらの著者の作品の日本語タイトルはすべて波田・溝辺他訳『文明化の過程』上（法政大学出版局，1978）に準じた。

16　Norbert Elias, 'On the Concept of Everyday Life' in J. Goudsblom and S. Mennell eds., *The Norbert Elias Reader*（Oxford: Blackwell, 1998）p. 169 参照。

17　Norbert Elias, 'The Changing Balance of Power between the Sexes in Ancient Rome' in J. Goudsblom and S. Mennell eds., *Norbert Elias*: *On Civilization, Power and Knowledge*（University of Chicago Press, 1998）pp. 188-99 参照。

18　Norbert Elias, *The Symbol Theory*（London: Sage, 1991）p. 147 参照。

19　マルクスに対するエリアスの見解として Norbert Elias, *Reflections on a Life*（Cambridge: Polity Press, 1994）pp. 115-19 参照。

20　Norbert Elias, *The Civilizing Process*, p. 276 参照。

21 Ibid., p. 278 参照。
22 Ibid., pp.365-78 参照。
23 Ibid., pp.382-387 参照。
24 Ibid., p. 386.
25 Norbert Elias, 'The Concept of Figurations' in *The Norbert Elias Reader*, p.131 参照。
26 デュルの批判に対するエリアスの反論として Norbert Elias, 'Was Ich unter Zivilisation verstehe: Antwort auf Hans Peter Duerr' in N. Elias, *Aufsätze und Andere Schriften* III (Suhrkamp, 2000). S. 334-41 参照。
27 エリアスの方法論に関する論争については，S. Mennell, *Norbert Elias*: *An Introduction,* pp. 227-70 を参照。
28 Norbert Elias, 'The Civilizing of Parents' in *The Norbert Elias Reader*, pp. 189-211 参照。
29 Norbert Elias, 'Informalization and the Civilizing Process' in *The Norbert Elias Reader*, pp. 235-245 参照。
30 Norbert Elias, 'Technization and the Civilizing Process' in *The Norbert Elias Reader*, p. 229.
31 「非形式化」について論じた最近の著作として Cas Wouters, *Informalization*（London: Routledge, 2008）がある。日本の文明化の問題との関連では Akira Ohira, ed., *Norbert Elias and Globalization*（Tokyo: DPT Publishing, 2009）がある。『アメリカの文明化の過程』については注 8 を参照。